

西医学部ウォーカー

- 1面：保健学科設置
- 2面：新任教授紹介
- 3面：シリーズ新中央診療棟
- 4面：臨床実習入門座談会
- 5面：弘前国際医学フォーラム
- 6面：国際交流報告
- 7面：平成12年度慰靈祭
- 8面：研究室紹介内科学第二講座
- 9面：東医体夏期大会成績
- 10面：魅力ある医学部へのアイデア受賞
題字 医学部長 遠藤正彦氏筆



最終的には入学定員二百三十名となる我が国最大級の保健学科となる。医学部保健学科に対する、青森県内はもとより近隣各県からの期待は大きく、その期待に応えるべく保健学

長年の懸案であつた医療技術短期大学の四年制大学への昇格が、医学部保健学科の新設というかたちで実現した。従来の医療技術短期大学と教育学部特別学科（看護）教員養成課程を統合し、文部省の承認を得て本年十月一日付けで医学部保健学科として発足した。

その記念式典、祝賀会が、十月五日、ホテルニューキヤツスルで盛大にとり行われた。当日午後四時より「署の間」において各界ご来賓を始め学内関係者百五十名の出席者をいただき盛大に記念式典が行われた。まず遠藤正彦医学部長の式辞に始まり、吉田 豊弘前大学長挨拶の後、来賓祝辞とし工藤智見文部省高等教

局長をはじめ青森県知事、弘前市長、青森県医師会長のお祝辞をいただいた。続いて午後五時から「麗峰の間」において祝賀会が行われた。菊池弘明初代保健学科長より挨拶の後、森本忠興国立短期大学協会副会長、新藤幸恵青森県立保健大学長の祝辞があり、白瀬勇元弘前大学長の音頭による乾杯で祝宴の幕が開けられた。和やかな雰囲気で祝賀会は経過し、会場では保健学科設立にあたつての紆余曲折、苦労話や、エピソードなど話に花が咲いていた。学年進行に伴う就任予定の教官も大勢参加し、華やいだ雰囲気の中にも、周囲の今後の保健学科に対する期待と保建学科関係者の決意が

医学部保健学科設置 記念式典・祝賀会開催される

衛生学講座教授
菅原和夫

第1回受賞者決定!!

魅力ある弘前大学医学部に 転換させるためのアイデア

魅力ある弘前大学医学部に転換させるための方策を医学部ウォーカー第十四号で募集しましたが、教職員・大学院生・医員・研修医より八件、学生より十三件の応募がありました。十一月二十九日に開催されました当編集委員会において、応募者名を削除の上、募集要項に沿つて厳正に審査を行いました。教職員等の部では残念ながらウォーカー特別賞の該当はなく、佳作二編を選出しました。学生の部ではウォーカー学生賞の候補作が二編選ばれましたが、甲乙つけがたいという結論となり両者とも学生賞としました。さらに、学生の部より佳作二編を選出しました。受賞者名は以下の通りです。なお、受賞者へは規定通り、奨学寄付金あるいは希望の医学図書が贈られますので、総務課文書調査係まで連絡して下さい。

科のみならず医学科としても、密接なる連携の下に共に協力しあい、弘前大学医学部とともに今後の大いな発展が期待される。新設されたばかりの保健学科ではありますがあつたが、二年後にはある弘前大学医学部の一員としての自覚と誇りを持つて今後の精進が期待されます。



医学部長寄稿

講座等の管理運営に関する 外部評価を終了して

医学部長 袁藤 正彦

医学部・附属病院の不祥事は、講座等の管理運営に特化した外部評価をうけた（本文紙前号に詳細に記載されている。）この外部評価は、医学部及び同附属病院の最小小機能単位としての講座・部門の管理運営のあり方にメスを入れたもので、その評価結果は、「弘前大学医学部・附属病院 外部評価報告書」（講座運営等に関する外部評価（平成十二年五月二十七日））として公表された。

この報告書は、当医学部の講座・部門等の管理運営のあり方において、構成員相互のコミュニケーションとその講座・部門の意志の決定、特に昇任や地域への医師派遣等の人事のあり方にについて重大な問題があることを指摘している。このことは、特に当医学部に限つたことではないとしても、この外部評価事態が国的にみて初めてであり、新聞の中央誌が全国版において報道したことから、私立大学医学部を始めとする医学・医療機関が、当医学部のこの外部評価への対応に強い関心を寄せている。

当医学部の不祥事に限らず、全国大学病院における医療過誤の際には、必ずと言って良いくらい、諸問題の根源として講座制度・医局制度が俎上に載せられており。言われるよう、講座・医局は、戦前戦後当時は教授を頂点としたヒエラルキーにより成り立つて、教育・研究・診療等が絶対的権力を有する教授により運営されていたという点は事実のようであるが、大学紛争後このような講座

医局の実態はあり得ない。では問題がどうして発生するかと言えば、外部評価が指摘するように、講座構成員相互のコミュニケーションの欠落であり、講座内の諸事の決定方法に問題があることは明白である。この意志の疎通、意志の決定に問題があるからこそ、特に最近当医学部において、講座内部で討議して十分解決されるべきはずの事が、内部告発の形で外部に一気に持ち出されるという不祥事が続いている。

これから外部評価に如何に対応するかについては、現在外部評価具体化委員会が検討を進めている。第一には、旧来の権力主義的に悪いイメージのある医局の名称を公的には廃止し、講座・部門の管理運営において構成員の意志を反映させるための、講座・部門の会議をオーソライズさせること、第二には、構成員としての教授以下の教官の権限と責任及び役割分担を明確にすること、第三に、教官相互の意志の疎通と講座・部門間の連繋の強化を図る方策を講じること、第四に、教官選考方法の改善を図ること、そして第五に、地域医療に対する本学としての対応方法の改善を図ること等を柱として、その具体化が進められている。当医学部の様々な改革が少しずつ実を結び、その成果が現れてきて、外部からの評価も高まってきた。現在は、教官を始めとする構成員の意識の変革が強く求められている。もう後どりはできない。独立行政法人化は既定の事実である。



新任教授紹介



脳神經血管病態研究施設 佐藤能啓 教授
機能回復部門

皮膚科學講座 花田勝美教授

私は昭和二十七年六月に福岡県浮羽郡で出生し、高校までは地元で過ごしました。親族に医師はだれもおらず、たゞ漠然と医師という職業の専門性の高さにあこがれの気持があり、昭和四十六年弘前大学医学部進学課程に入学しました。学生時代は皮膚科帽子教授（当時）が部長をされていたラグビー部中心の生活を送り、四年生までは勉学に不熱心な学生でした。ちなみにラグビー部入部一年生の際には、四年生に医療情報部羽田教授、三年生に脳血管病態

共に地元の久留米大学第一内科 大牟田労災病院神経内科（志田堅四郎先生）に入局し、神経学と内分泌学の研鑽を開始致しました。その後四年四月から一年余り鹿児島大学井形昭弘教授の元に留学し、神経学の眞の面白さを教えて頂き、その暖かいお人柄や医学に対する高い見識にひかれ、恩師と仰いでいます。ちなみに分子病態部門若林教授の入局時の新潟大学神経病理生田田代に井形先生に巡り会わなかつた心醉者でした。もし二十歳代に井形先生に巡り会わなかつた

臨床研究論文をまとめることができました。その後は主に市中病院で脳血管障害およびパークinson病の機能回復陽性因子、老年医学、骨代謝学などを学んできました。具体的には神経疾患に伴う不動が骨格筋形態や骨代謝に及ぼす影響、不動性高カルシウム血症の病態生理の解析、骨代謝調節因子の解析、脳血管障害による大脳骨頸部骨折の薬物による予防、パークinson病および脳血管障害における大脳骨頸部骨折の予知因子の検討、脳部骨折の予知因子の検討、脳

ドで疑問に感じたことを研究テーマとしてきましたが、今後はこれまでの成果から得られた仮説を検証すべく、一層の発展を目指して行きたいと思います。殊に高齢化社会の我が国で、機能回復を科学的に研究することは重要な任務だと感じております。ちなみに、一つの研究が完成しますと、発見の喜びが当惑ありますが、それはあくまでも一過性で、その結果をもとにさらに新しい事実が知りたくなり、次のステップの仕事を開始し、工ンドレスです。つまり研究と

共有したいと考えております。神経学ことに脳血管障害やパーキンソン病のphysica medicine、筋肉病学、骨代謝、リハビリテーション医学などに興味と好奇心のある方なら誰でも歓迎します。

二十三年ぶりの弘前の晩秋の寒さに地球温暖化を差し引いても身にこたえますが、勝手知ったる人情味豊かな津軽の地で研究生活が送れるに感謝しております。もとより浅学非才の身ですので、皆様方のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

た。徹マンの翌日の土曜日の講義は（その当時は土曜日は半日授業があった）、当然廿ボルことになり（諸先生方由し訳ありませんでした）、我々の仲間は留年の危機に陥りました。それでも仲間で何とか助け合つて卒業し、ほとんどのものが現在医者になつて活躍しております（数人の変わります）。

者も基礎にいます。

ここで私自身の卒後の遍歴を少し述べてみます（皆さん）の参考になるかどうかはわからませんが、このよな生き

う環境ではほとんど野放団な状態で四年間を過ごしました。加藤教授から、「君は大学院に入ったからには人から教えて貰おうと思ってはいけない。大学院は自分でなんでもやつてみて覚えるものだ。」と最初に言されました。根が馬鹿正直なものですから、それを信じ込み、本を拾い読みしながら自分でコツツヤつていました。すると当然ながらやることは失敗ばかりでした。

史同様開講五十年の歴史を有し、現在では百二十名余の同窓会員を擁する大所帯に成長しております。私は昭和四十五年、ビタミン代謝研究の終焉を迎えた現総子名誉教授の教室に入局させていただきました。その後、微量元素とくに亜鉛代謝に興味をもちました。それは、半世紀にわたり原因不明とされた腸性肢端皮膚炎が実は先天性の亜鉛欠乏症であることが判明し、亜鉛の投与により皮膚炎が早露のごとく消失することに感動しましたからです。亜鉛の研究は金

できず、皮膚がからだの最外層に位置する臓器であることから、紫外線性皮膚障害（皮膚癌、光老化）や紫外線防護の研究は今後欠かすことのできない研究分野になります。

また、あざに対するレーザー治療、皮膚癌に対する光力学療法など侵襲の少ない光線治療が普及しつつあり、多くの患者さんに光明を与えていきます。皮膚癌や光老化を惹起する元凶となる紫外線も実は使いようによつては皮膚の免疫能をコントロールでき、アトピー性皮膚炎の治療に応用

れないことが新聞紙上に掲載され、皮膚癌の増加が懸念されています。オゾン層の障害は南極に限った現象ではなく、北半球でも同様の現象がみられています。紫外線性皮膚癌の発現にはいくつもの因子が介在しますが、いずれにしても啓蒙こそが最大の防御。今後は小児に対する紫外線防御の啓蒙に努めたいと考えています。

教育、診療、研究の各分野にわたり、今後のご理解とご協力を願いして就任のご挨拶に代えさせていただきます。

昭和五十五年卒業の若宮伸隆といいます。この度、平成十二年十一月一日付けをもつて旭川医科大学医学部微生物学講座教授に就任しました。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



を基本とした免疫学や細胞生物学が研究の主体です。初めから宣伝になりますが、臨床も面白そうだが基礎医学もすこしかじってみたいと考えられている学生、研修医、医局員のみなさん卒後の進路先の一つとして数年間じっくり楽しく基礎研究する人を求めています。どうぞ旭川医大微生物学講座までご連絡下さい。

導入されて初年度から医学教育が始まってますが、あの頃は初めての二年間は一般教養のみで気楽な毎日でした。高校時代クラブ活動などで受験勉強に乗り遅れて、大学に入るので寄り道をした私は、教養時代二年間最小限の講義しか受けず、読書とギターに明け暮れました。音楽は四畳半のオーラが全盛で、現在も活躍している井上陽水や南こうせつとかぐや姫の歌が愛唱されていました。それと熱中したのは麻雀です。近年の学生はほとんど麻雀はしないよう西田勝先生（前日本小児科学会会長で、その当時は大阪府立病院小児科部長）が医局に招に行つたときに、たまたまおられて、大学より症例も多いし免疫の研究もできると言わわれて、大阪府立病院で本格的な研修生活を始めることになりました。西田先生は白血病の専門家であった為に多くの白血病患者が集まつております。それらの患者さんを診ていてうちに、あまりに基礎知識が無いのに気付きこれは本格的に生化学や免疫学を勉強しなくて何となく小児科の医局へ挨拶に行つたときに、たまたま

平成十二年十二月一日付け
で、橋本功教授の後任として弘前大学医学部皮膚科学講座を担当させていただくことになりました。まさに二十一世紀の幕開けを迎える時期に大任を与えられことになり光栄に感じるとともに身の引き締まる思いも致します。

属結合蛋白メタロチオネインの研究につながり、さらにこの蛋白が抗酸化能を有することから、紫外線防御の楯とする仕事へ発展しました。これが縁で留学への道が開かれ、現在のメインテーマである「光医学」に入るきっかけとなりました。所詮、ヒトは太陽光

テロイドが可能になります。前記した紫外線性皮膚癌は、新しい癌治療手段である光力学療法の格好の対象になります。まさに、「光で起こされた皮膚障害は光で治療する」というわけです。

先生 講座に!!

若宮伸隆先生 旭川医大教授!!

私の弘前大学時代の思い出としては、いろんな印象的な先生方に授業を受けたことがあります。一番の思い出です。大阪から出てきたので言葉に最初は苦労しましたが、なれると親しみが出てきて、いまでもテレビやラジオで津軽弁を聴くたびに懐かしくなります。大学は、いまでは六年一貫教育が導入されて初年度から医学教育が始まっていますが、あの頃は初めての二年間は一般教養のみで気楽な毎日でした。高校時代クラブ活動などで受験勉強に乗り遅れて、大学に入るので寄り道をした私は、教育時代二年間最小限の講義しか受けず、読書とギターに明け暮れました。音楽は四畳半フォークが全盛で、現在も活躍している井上陽水や南こうせつとかぐや姫の歌が愛唱されていました。それと熱中したのは麻雀です。近年の学生はほとんど麻雀はしないようですが、あの当時、我々劣等生仲間は解剖が終わった金曜日の夜は、五重塔の煎餅屋の二階の友の下宿で、徹マンがいつものパートーンでした。そのために、四人が揃って早く解剖実習を終了しなければならないので、葛西教授の目を盗んでは、すこし端折っては時間あわせをしておりました。徹マンの翌日の土曜日の講義は（その当時は土曜日は半日授業があった）、当然サボることになり（諸先生方申し訳ありませんでした）、我々の仲間は留年の危機に陥りました。それでも仲間で何とか助け合って卒業し、ほとんどのものが現在医者になつて活躍しております（数人の変わり者は基礎にいます）。

ここで私自身の卒後の遍歴を少し述べてみます（皆さん参考になるかどうかはわかりませんが、このような生き

弘前大学は総合四位!!

第四十三回東医体夏季大会成績

今年の東医体ではラグビー部、準硬式野球部、バドミントン部が優勝を飾り、さらに女子バレー部が初出場ながら見事全医体で準優勝に輝くなど、健闘が目立つた。団体戦のみならず個人戦でも、卓球の男子ダブルスが優勝、空手道の男子個人組手が三位と好成績をおさめた。総合得点は四一点で昨年の九位から大きく躍進、三位の北海道大との差はわずか三点であった。学生諸君の健闘を讃えるとともに、総合優勝を目指し今後一層努力されることを期待し、支援したい。

(若林記)

バドミントン部

団体優勝の喜び

主将 渡辺恭孝
(医学科 四年)

東医体優勝までの道のりは長く本当に辛いものでした。

バドミントンの団体戦は、ダブルス二つ、シングルス三つの勝敗で決まります。

基本的には個人戦ですが、団体戦ではプレッシャーがあり、実力以上にメンタル面が大切になります。

去年の北医体・東医体・今年の北医体と二勝二敗という大事な場面で迎えた、僕の最終シングルスで、相手を追い込み、誰もが勝つたと思つた瞬間、精神的な弱さからか、無理をしきぎ、途中で足をつるなどして何とも嫌な負け方をしてきました。そんな時、今年の北医体で個人戦のシングルス・



指導して下さり、六年生も勉強が忙しい中、一所懸命部活に来てくれました。そして、テスト勉強と、練習の日々に苦しみながら、東医体の日を迎えるました。

東医体一回戦、相手は実力的にほぼ互角の千葉大学。団体メンバー同志でこの試合が始まりました。厳しい試合が続いている間に、六年生の谷口さんが最後まであきらめずシャトルを追い、勝利をおさめたその姿にみんな感動し、勇気づけられ、逆転して勝つことができました。その後まで、その勢いを保り、勝利を取つたりといふ具合。応援席にも気合が入り、一年生が作つた独自の応援が響き渡る。ベンチでスコアを記入する人も、ビデオを取る人も手をとめて応援にまわった。一セットを取り返した。三セット目、弘前と群馬のどちらが二十五点を先に取るかという瀬戸際、ここで精一杯で試合に臨んだ。

初戦の相手は群馬。この試合が始まると私とキヤブテン佐々木は、群馬が関東大会の優勝校だと聞いていた。私たちには少し気持ちが

二〇〇〇年夏、ようやく東医体に初出場することができました。医学部に女子バレー部を結成した五年生にとつては、最初で最後の東医体。

東医体バレー部の五人佐々木をはじめ、レフトに四年松本と二年有賀、セントナーに一年小林と私四年栗田、そしてライトに五年年佐々木をはじめ、レフト

が輪を作りました。部員達が輸りましたが、急きよ出場することになつた六年生の藤田さんが誰よりも練習を重ね、結果的に優勝したという報告を聞いたとき、みんなで勝ち取つた優勝

が輪を作りました。部員達が輸りましたが、急きよ出場することになつた六年生の藤田さんが誰よりも練習を重ね、結果的に優勝したという報告を聞いたとき、みんなで勝ち取つた優勝

東医体全医体初出場

主将 栗田真紀子
(医学科 四年)

二〇〇〇年夏、ようやく東医体に初出場することができました。医学部に女子バレー部を結成した五年生にとつては、最初で最後の東医体。

二戦目対防衛出場するからにはもちろん優勝を目指すという意気込みは十分あつた。東医体バレー部の五人佐々木をはじめ、レフト

が輪を作りました。部員達が輸りましたが、急きよ出場することになつた六年生の藤田さんが誰よりも練習を重ね、結果的に優勝したという報告を聞いたとき、みんなで勝ち取つた優勝

女子バレー部



二〇〇〇年夏、ようやく東医体に初出場することができました。医学部に女子バレー部を結成した五年生にとつては、最初で最後の東医体。

二戦目対防衛出場するからにはもちろん優勝を目指すという意気込みは十分あつた。東医体バレー部の五人佐々木をはじめ、レフト

が輪を作りました。部員達が輸りましたが、急きよ出場することになつた六年生の藤田さんが誰よりも練習を重ね、結果的に優勝したという報告を聞いたとき、みんなで勝ち取つた優勝

が輪を作りました。部員達が輸りましたが、急きよ出場することになつた六年生の藤田さんが誰よりも練習を重ね、結果的に優勝したという報告を聞いたとき、みんなで勝ち取つた優勝

が輪を作りました。部員達が輸りましたが、急きよ出場することになつた六年生の藤田さんが誰よりも練習を重ね、結果的に優勝したという報告を聞いたとき、みんなで勝ち取つた優勝

が輪を作りました。部員達が輸りましたが、急きよ出場することになつた六年生の藤田さんが誰よりも練習を重ね、結果的に優勝したという報告を聞いたとき、みんなで勝ち取つた優勝

が輪を作りました。部員達が輸りましたが、急きよ出場することになつた六年生の藤田さんが誰よりも練習を重ね、結果的に優勝したという報告を聞いたとき、みんなで勝ち取つた優勝

